

## 国際アーサー王学会日本支部 2024 年第 38 回年次大会発表要旨

### 研究発表 1

#### フェニスの墓、あるいは驚異的建造物

武藤奈月（ソルボンヌ大学大学院博士課程修了）

クレチアン・ド・トロワの『クリジェス』（1176 年頃）は、トリスタン・イゾー物語との関係や仮死のテーマについて、これまでに数多くの研究の対象となってきた。トリスタンとイゾーが迎えた悲劇的な結末を避けるために、クレチアンは、フェニスの侍女テッサラが作る魔法の水薬や建築家ジャンが建てる塔を導入している。塔と同様にジャンが建てた墓は、仮死状態となったフェニスが生まれ変わるための重要な場である。その墓の描写には、同時代の作品との相違や聖書からの借用など、様々な要素が見られる。

本発表は、同時代や後世の物語と比較検討を行ないつつ、フェニスの墓の新規性を示すことを目的としている。それまでの物語作品では描写の場であった墓地は、『クリジェス』以降、冒険の場へとも開かれていく。以後、13 世紀以降のアーサー王物語では、墓地は、悪魔にも遭遇する危険な場へと変容していく。

### 研究発表 2

#### ウィーンベルヴェデーレ宮における中世コレクションの展示について

渡邊徳明（日本大学）

ベルヴェデーレ宮はハプスブルク家に仕えた名将として名高いサヴォイ公子オイゲンによって 18 世紀前半に建てられた。ユネスコの世界文化遺産に登録されており、中世から現代まで、800 年にわたるオーストリア美術のコレクションを誇る美術館である。1903 年に美術館として開館し、今日ではとりわけクリムトの絵画コレクションで世界的に知られるが、この美術館は 1953 年に中世コレクションの所蔵品の展示も開始した。

ウィーン美術史美術館とベルヴェデーレ美術館は、共にハプスブルク家の至宝とも言える名品の数々を所蔵・展示しているが、その役割は異なる。前者がヨーロッパ各地を支配したハプスブルク家の、とりわけフランドル地方やイタリアにおける世界的名品を所蔵するのに対し、後者はあくまでオーストリア内で作られた名品を所蔵している。

ベルヴェデーレ美術館は上宮と下宮の 2 箇所に分かれ、それぞれの中世展示の方法とコンセプトは異なる。発表者は 2024 年 8 月に同美術館のリサーチセンターにて調査・研究を行う機会を得て、上記の展示方法の違い及び最近の変更点と意図について、中世担当の学芸員より案内と解説、資料提供を受けた。その内容を基に、発表者は、鑑賞者の作品受容における効果、および同美術館の全展示の中での中世コレクションの位置づけについて解説す

る。

更に、発表者はグラーツ、インスブルック、リンツの博物館において、中世からルネサンス期における作品を鑑賞した。それらの博物館での展示と比較しながら、ベルヴェデーレ美術館における中世コレクションの展示の特徴を明瞭に示したいと考える。

### 研究発表 3

#### 頭韻詩『アーサーの死』(the alliterative *Morte Arthure*)再考～Clarence の変容と Mordred 不破有理 (慶應義塾大学)

頭韻詩『アーサーの死』はサー・トマス・マロリーの『アーサー王の死』(Sir Thomas Malory, *Le Morte Darthur*, 1469/70 年)の典拠として重要な作品で、15 世紀初頭のソートン写本 (Lincoln Cathedral Library 91) にのみ残存し、作者・制作年ともに未詳の作品である。「アーサー王物語の伝統を最も力強く、最も独創的に扱った作品のひとつ」と古くから評されるが、どのような点で独創的なのか。

アーサーとモードレッドの最後の戦いにおいて、モードレッドは剣クララントを手に戦う。中英語アーサー王ロマンスには見られない特異な剣名である。クララントはクラランス (Clarence) に由来する。古フランス語流布本の『散文ランスロ』と『メルラン』ではアーサー軍の「鬨<sup>とぎ</sup>の声」、「城砦都市名」として言及され、さらに「公爵名」としても知られている。本発表では、クラランスの変容とモードレッドの特異な造型を手掛かりに、頭韻詩を歴史的文脈とアーサー王伝承の伝統に位置づけ再評価を試みたい。

### 講演

#### 「騎士道物語のパロディとしての『ドン・キホーテ』」 斎藤文子 (清泉女子大学)

中世ヨーロッパで人気を博した騎士道物語は、イベリア半島ではなかなか広まらなかった。8 世紀初めから 15 世紀末まで、イスラーム教徒からの国土回復 (レコンキスタ) の戦闘がつづき、貴族たちの中で騎士道物語を楽しむ余裕がなかったからだとされている。レコンキスタが進展した 14 世紀になってようやく、おもにフランス由来の騎士道物語のカスティーヤ語 (スペイン語) 訳が写本の形で流布するようになる。15 世紀後半に印刷技術がスペインに入ってくると、売れる本を探していた印刷職人は、写本の物語に目をつけ、印刷本の形で流通させ、他地域に遅れてスペインで騎士道物語の流行が生じる。

きっかけとなったのは、ロドリゴ・モンタルボが、写本で伝わっていた作者不詳の騎士道物語を書き直した 4 巻本の『アマディス・デ・ガウラ』である。1508 年に出版されるとた

ちまち評判になり、その後 40 年間でアマデイス一族の物語が 12 編作られ、模倣作も書かれた。ヨーロッパの他言語にも翻訳されることとなった。

『アマデイス・デ・ガウラ』の出版からおよそ 100 年後、1605 年にスペインで『ドン・キホーテ』が刊行される。槍をかかげて風車に突きかかっている主人公の姿で知られる小説だが、その序文にはこう書かれている。「この書物のねらいは騎士道物語が世間と大衆のあいだで享受している権勢と名声を打倒すること以外にない」。また 10 年後の 1615 年に出た続編の最後は「騎士道物語はわが真実のドン・キホーテの物語の出現によってすでによろめいているのであってみれば、近いうちに完全に倒れるであろうことに疑問の余地はない」と締めくくられている。作者セルバンテスは、スペインで大人気だった騎士道物語への敬意と批判を盛り込んで、この滑稽なパロディ小説を書いたのである。

『ドン・キホーテ』は、騎士道物語を昼夜問わず読みふけた挙げ句、現実世界と本の中の空想世界の区別がつかなくなり、自分もヒーローになったつもりで、世のなかの不正をただし、悪を懲らしめるために、馬にまたがり遍歴の旅に出た 50 歳近くの男の話である。小説の中には、騎士道物語の朗読を楽しむ街道沿いの宿の主人とその家族も登場する。多くの人の心を虜にした騎士道物語のいったい何をセルバンテスは批判しようとしたのか、どういう点をパロディにしたのか、そして、このパロディの書が、どのようにして西洋近代小説の元祖と位置づけられるようになったのかを考察する。